

| | | | |
|---------|--|------|------|
| 氏名(本籍) | 井田仁康(茨城県) | | |
| 学位の種類 | 博士(理学) | | |
| 学位記番号 | 博乙第762号 | | |
| 学位授与年月日 | 平成4年3月25日 | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当 | | |
| 審査研究科 | 地球科学研究科 | | |
| 学位論文題目 | A study on regional differences of air passenger flow patterns and the cause of the regional differences (我国における航空旅客の流動パターンの地域的差異とその要因に関する研究) | | |
| 主査 | 筑波大学教授 | 理学博士 | 奥野隆史 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 理学博士 | 佐々木博 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 理学博士 | 高橋伸夫 |
| 副査 | 筑波大学助教授 | 理学博士 | 斎藤功 |

論文の要旨

財・人の空間的流動のパターンは量的・質的に多様であり、その正確な実態把握は資料の制約などのため不十分であり、また、流動パターンの地域的特徴は流動の発着地の属性に規定されると従来から指摘されていたが、分析の枠組みの不備のため十分な解明がなされなかった。とりわけ、交通流動の主要部を最近占めるに至った航空流動に関してはその傾向が強くみられる。本論文は、わが国における航空流動を対象としてその空間的パターンを、(1)流動の焦点となる空港とその後背地の間および空港間の流動と(2)発・着地間の流動の2成分に流動現象を分割することによって明らかにし、さらに、これら2成分に関する空間的パターンと多数の地域属性との間の関係を多変量解析法の利用によって考察した。

まず、空港旅客動態調査から入手された資料に基づき、交通目的別の第1成分流動の地域的パターンを分析し、量的には東京・大阪間の流動とそれ以外の地域間の流動に区分することが可能であり、それらに対する対数線形モデルの適合から、前者のうちの近距離流動ではビジネス目的、その遠距離流動および後者の流動は観光目的をそれぞれ主体とすることが導かれた。次に、第2成分流動について空港利用旅客の発着地を調査し、その流動指向性を分析した。その結果、6タイプの空港後背地の存在とそれらの全国指向・関西中京指向・関東指向・地方指向の4類型への分類の可能性が指摘された。また、全国指向の後背地ではビジネス目的と観光目的の旅客に関する圏構造が抽出された。これら4類型に属する諸後背地から4つのもの(羽田・山形・小松・鹿児島)を選定し、それぞれに関する28の地域属性に対して因子分析を施すことによって主要属性を探索した。さ

らに主要属性と目的別発生・吸収旅客の間の関係についての重回帰モデルを後背地ごとに作成し、またこのモデルから求められた両者間の関係の時系列的安定性を検討するために正準相関分析を行った。その結果、全国指向を主とする東京・大阪間の流動は基本的には人口規模によって規定されることおよび地方水準の流動は商業・事業所規模によって変動することが明らかにされた。しかし、流動要因の重要性に関しては両者の間には著しい相違はなく、前者の縮小型が後者に相当するという二重構造の存在が指摘された。

審 査 の 要 旨

近年重視されている航空流動の地理学的研究は、資料の制約や方法論の未整備のため流動の要因を明確にしえなかった。著者は、資料を旅客実態調査に求めるとともに流動現象を流動結節点に基づく2成分に分割することによって流動の地域的差異を考察し、さらにその差異の要因を、因子分析に始まって重回帰分析を経て正準相関分析に至るという分析枠組みに沿って見出した。その結果としてわが国の航空流動が要因面からみて二重構造を呈することなどの知見を得ている。このような著者の業績は流動に関する地理学的研究に大きく貢献すると評価できる。

よって、著者は博士（理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。